

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月30日現在

機関番号：32406

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730345

研究課題名（和文） 在外日系児童の文化的帰属意識について

研究課題名（英文） Cultural References for the Children of Japanese Origin

研究代表者

岡村 圭子（OKAMURA KAYKO）

獨協大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：70383205

研究成果の概要（和文）：多文化・多言語環境に育つ日系の子どもの言語環境（日本語学習環境）や学習動機、習熟度は、通信ネットワークの発達と移動の低コスト化にともなっていますますます多様になってきている。そうしたなかで、一部の子どもにおいては、文化的な帰属意識が、国籍や居住地、母語のレベルに関わらず、より多元的もしくは複合的になってきている。その一側面として、ナショナルではない「ローカルな」帰属意識の高まりが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：Under the development of communication network and in reducing the cost of human mobility, linguistic/cultural environment and learning motivation surrounding the children of Japanese origin became more complex and divers. In such a situation, some of them tend to have multiple or eclectic cultural reference, including local identity, rather than national one.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：文化的帰属意識、多文化、多言語、グローバル化、言語教育

## 1. 研究開始当初の背景

1970年代以降、海外に渡航し生活する日本人が急増し、かれらの異文化適応の問題や、その子どもたちの教育に関する研究が盛んに行われてきた。平成16年度は、文部科学省所轄の在外日本人学校に在籍する児童数（小学校及び中学校相当年齢）は16,860人、日本の国籍（パスポート）を持ち海外で生活

する児童数は54,148人と発表されている。

日本語補習校は、1960年代～70年代にかけて、在外日本人児童・生徒の教育を目的として、日本企業が集中する都市に相次いで設置されたが、そこでは、日本政府による海外子女教育へのサポート同様、帰国予定の児童・生徒が対象であり、調査研究も両親が日本語を母語とし「日本に帰国する／帰国した」

児童（帰国子女）が主な対象となってきた。しかし、近年のグローバル化のもとでは、そこからは例外として扱われる児童の問題が表面化してきた。たとえばアメリカに長期滞在する日本人の子どもの現地化をめぐる問題は、南保輔（2000）や岡田光代（1993）によって指摘され、ドイツにおける日系児童の日本語習得の問題は、奥村三菜子（2005）やフックス真理子（2006）によって、教育学の分野から実践的取り組みがなされてきた。奥村によれば 2005 年時点、ドイツの補習校 12 校中 10 校では、在籍する子どもの半数以上が、両親の出生地が異なる「国際児」であるという。

こうした背景を考えると、本研究が調査対象とするような事例は今後、ますます増えていくと思われるが、今後それらを多角的な視座で分析する枠組みが求められている。すなわち、本研究が調査対象とするような在外日系児童をめぐる問題は、グローバル化が進む世界において、世界各国で見られ（もちろん日本国内でも同様）、たんなる「例外的」事例としては処理できなくなっているのが現状である。

そこで、当該テーマについては、現在、教育学や言語学からのアプローチが主流であるが、そこに社会学的（社会情報学的）な視点を持ち込み、考察することが重要であると考へた。すなわち、言語教育法や各言語の特質に着目するのではなく、子どもたちをとりまく言語的・文化的環境、そして親や日本語教師の日本語教育に対する態度と動機づけ、さらに子どもたちのメディア接触環境（グローバル化のなかの情報環境）に重点を置いて研究する必要がある。

以上のようなアプローチによって、これまでとは違った角度から価値観の多様化に配慮した議論の展開が可能になり、「理想的」教育環境や教育方法についての議論に終始することなく、調査対象者の価値観・意識の問題に取り組むことができ、さらには多文化共生社会のあり方を探る道標が導き出されるのではないかと考へた。

## 2. 研究の目的

本研究では、両親もしくはそのどちらかが日本語母語話者である、日本国外で育つ／育った児童（在外日系児童）の日本語学習環境に着目してきた。そこでは、かれらの日本語接触環境を詳細に調査する中から、文化的帰属意識（アイデンティティ）がいかにして構成されているのかを探り、現代的なグローバル社会における「移民」「ディアスポラ」「国籍」「ローカリティ」といった概念、さらには、多層的で複合的な文化的帰属意識の実態

について社会学的に再考することがねらいである。

本テーマについての議論は、申請者が一貫して探求してきた「自-文化と異-文化との関係性（異文化関係）において、いかにして文化的凝集性がつくり出されるのか」という問いに深くかかわっている。

本研究の長期的なねらいは、以上の論点のなかから、国籍や言語をもとに線引きした固定的かつ画一的なアイデンティティ概念を問い直すことである。それによって、広義の「多文化共生社会」のあり方・可能性を探る手がかりが得られるだろう。

## 3. 研究の方法

### (1) インタビュー調査

両親もしくはそのどちらかが日本語母語話者である、日本国外で育つ／育った児童（在外日系児童）とその親、および私立の補習校の教師へのインタビュー調査を中心に研究活動と位置づけ、適宜、文献研究を進めていった。

具体的には、日本人居住者の多いドイツのある都市に設立された私立の日本語補習校に調査協力を依頼し、そこに通学する 4～12 歳までの幼児・児童と、その親、教師たちから、子どもの言語教育や言語環境、日本への帰国頻度などについて、それぞれ 30～60 分程度、聞き取りを実施した。必要に応じて、ほかの教育施設で働く教師にもインタビューをした。

### (2) 視察

ドイツにおける日系児童のための日本語教育施設を視察。一方で、日本における外国籍児童のための補習校（滋賀県、群馬県にあるブラジル人学校）も視察し、その実態について、教師やそこにかかわるスタッフに聞き取り調査を行った。

### (3) 文献研究

以上の（1）と（2）に並行して、主に欧州のドイツ語圏で使用されている子ども用の日本語教材や、本研究テーマに関連する資料・文献などを収集し、それをもとに、海外における日本語教育の現状や歴史、先行研究について理論的な考察を行った。

以上の 3 つのアプローチを柱に、とくにインタビューでは、主に以下の 7 つの問いをたてて調査を進めていった。

①「国語」と、外国語としての「日本語」のどちらを、どのように子どもたちは学んでいるのか、またそれは子どもたちの「日本

人」か「非-日本人」かのアイデンティティ形成にどれほどの影響しているのか

- ②調査対象者にとっての、いわゆる「“純粋な”（ネイティブの）日本人」ということの真正性とはなにか、正しい日本語を流暢に話すとはどういうことか
- ③子どもの日本語学習動機・態度は親の期待とどのような相関関係にあるのか
- ④子どもの日本語学習動機・態度は親の渡航（日本国外での居住の）動機とどのような相関関係にあるのか
- ⑤社会的・経済的階層差は、子どもの日本語習得の達成度合いや、現地化の度合い（アイデンティティ形成）と相関関係にあるか
- ⑥日本への親近感／当該地域の日本人社会からの疎外感を感じたことはあるか、またそれはどのようなときに感じたか
- ⑦当該地域における教育に関する価値観と日本のそれとの違いはどういったものか、またそれに対してどのような態度をとっているか／とってきたか

#### 4. 研究成果

申請者が一貫して論じてきた大きなテーマは、グローバル化する世界における異文化関係の諸相についてである[岡村 2002]。今回の調査研究では、そこで提起された仮説（グローバル化はローカル文化やローカルなアイデンティティを駆逐するものではなく、グローバル化とローカル化が同時、それぞれ相補的に起こる現象である）について検証した。

グローバル化を「記号の流れ」として捉えたとき、グローバル化がローカルな凝集性を再帰的に生み出し、なおかつそこでの異文化関係はきわめて重層的で流動的なものとなる。そういった視点においては、諸個人の文化的帰属意識や言語的帰属意識は多様化・複合化し、国家的な（国民的な）帰属意識だけがアイデンティティの中核を担うものではなくなる。

今回は、上記3. 研究方法で挙げられた7つの問いを検討しながら調査を進めていった。その結果、実際に、多様な、あるいは複合的な文化的帰属意識を持つ子どもが多くみられた。[3]～[5]の相関関係に関しては、まだ調査が不十分であり、今後さらに継続して調査する必要があるが、現段階で明らかになったことは、そうした文化的・言語的帰属意識の背景には、情報・通信ネットワークの

発展と、国際移動の低コスト化、換言すればグローバル化の影響が挙げられることである。

調査協力者からの聞き取りによれば、頻繁に日本とドイツを行き来したり、日本にいる親類や知人とのコミュニケーションがごく日常的に実践されている。さらに、今後詳細に調査すべき点でもあるが、メディア接触状況（マンガの購読、アニメや日本の音楽の視聴など）と、日本の大衆文化への国際的な評価もまた、かれらの文化的帰属意識の形成に大きな影響を与えている。

帰属意識の多様化・複合化は、実際の社会的な生活の中だけではなく、近年の学問的なアプローチにおいても着目される論点である。従来までの異文化間コミュニケーション研究においては、「異文化」は国家と国家（国民性と国民性）との違い——一般的にそれは国際関係と呼ばれる——に限定されがちであったが、近年のグローバル化によって、国際関係は異文化関係のヴァリエーションのひとつとなり、むしろ地域文化や宗教、社会階層などによって生じる文化的差異をもとにした動的でフレキシブルな異文化関係に、その論点がシフトしてきている。

複数文化・言語環境に育つ子どもたちのアイデンティティ形成の過程を実践的アプローチならびに理論的アプローチ双方から調べるなかで、ローカルな帰属意識という概念が重要なキーワードとして挙げられる。たとえば、近年の若者文化の一部においては、かれらが生育した場所もしくは活動している場所（ローカルな領域）への帰属意識が特徴的である。かれらにとってのローカルな領域とは、場合によっては、どこの国籍を持っているか、何語を母語としているか、といった問いかけに表わされるような固定的かつ画一的なアイデンティティ概念を、根底から覆すような重要な要素なのである。

今後は、前述したメディアと帰属意識とのかかわり、およびローカルな帰属意識とグローバル化とのかかわりをより具体的に考察していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計3件）

- ① 岡村 圭子 Nationality and Local-Cultural Identity: The Japanese-German Children in Düsseldorf, 第17回国際社会学会 (ISA) 世界大会、2010. 7. 16、ヨーテボリ（スウェーデン）

②岡村圭子 The Created Local Cultural Unit: How YaNeSen Has Been Regarded a Local Culture?, 第 39 回世界社会学機構 (IIS) 世界大会、2009. 6. 12、エレヴァン (アルメニア)

③岡村圭子 Globalized “Japanese” Culture and Its Originality, Hybridity and Nationality: What Makes Localization Enforce、第 38 回世界社会学機構 (IIS) 世界大会、2008. 6. 29、ブダペスト (ハンガリー)

[図書] (計 3 件)

①岡村圭子 (単著)

ミネルヴァ書房、『ローカル・メディアと都市文化』、2011 年、335 ページ

②Kayko OKAMURA (Nobuko ADACHI 編) Cambria Press、Japanese and Nikkei at Home and Abroad: Negotiating Identities in a Global World (第 4 章 “Multicultural Identity in a Global Society: Locality and Nationality of Contemporary Children of the Japanese Diaspora in Germany” を担当) 2010 年、350 ページ (うち 87~104 ページを担当)

③岡村圭子 (増谷英樹編)

有志社、『移民・難民・外国人労働者と多文化共生』(第 II 部、第 5 章「多文化共生社会における「くに」と言葉——国家の狭間に育つ児童の現代的帰属意識」を執筆) 2009 年、250 ページ (うち 179~198 ページ担当)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡村 圭子 (OKAMURA KAYKO)

獨協大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：70383205